
紅の王

桐ヶ谷 炎龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の王

【コード】

N8606M

【作者名】

桐ヶ谷 炎龍

【あらすじ】

剣と魔法の飛び交う世界

そんな世界のせいで犯罪が多発し、人々は安心して生き抜くことは出来なかった

そして、そんな世界故に異常な姿を持つモンスター達ものさばった

だからこの世界には警察と、ギルド所属のバウンティハンターがいる。

主人公・蒼龍詩音ソウリュウシオンもギルド所属のバウンティハンターだった。

だが、ギルドマスターのせいで詩音の生活は一変した。

与えられた任務は

『女子校でギルドマスターの娘を護衛すること』だ

姫の護り神

荒れ果てた広大な大地に一人の少年が立っていた。

髪はきれいな漆黒で顔立ちもよく、優しい印象を抱かせる。

それに、見える肌は陶磁器のように白く、細い体をしている。

眼は澄んだ空色をして少年の纏う雰囲気似合っている。

着ている物は黒の半袖トレーナーに黒のズボン、そして紅いマントだ。

ただ、異質なのは少年の足下に転がっている数々の肉片と少年の手に握られている返り血を浴びた深紅の刀だけだろう。

少年はすべて終わったと思って気を抜き、刀についた返り血を拭いた。

だが、実はまだ終わっていないかった。

グギャアアアアアアアア

そんなウザったい鳴き声をあげて、地面から大きなムカデが出て来た。

「まだ生きてる奴がいたのか」

少年はそう呟いた後、刀を構えた。

大ムカデは未だ地面に潜ませている尾を使って背後から串刺しにしようとした。

少年は大ムカデの攻撃をわざと見逃し、ギリギリのところまで避けた。

大ムカデの尾は避けられたせいで醜い体に直撃し、僅かに怯んだ。

その隙を逃さず刀で切りつけ、危険な尾を胴体から切り離す。

その時に緑の血が吹き出したが下級魔法で血ごと攻撃した。

グギャアアアアアアアア

炎に焼かれて大ムカデは悲鳴を上げる。

だが、その悲鳴さえもすぐに消えた。

「これが最後の一匹か？」

少年はきれいに左右に分かれた大ムカデを見ながら独り言を呟いた。

そして、気を緩めたフリをしてしばらく立って見たが動く気配は欠片も感じない。

じゃあギルドに帰るか。

任務の受領（前書き）

詩音の性格がかなり黒いですが、クソ爺オンリーの態度なので気にしないで下さい

任務の受領

「よう、色男!!」

ドゴンッ!!

ギルドに入った瞬間そんな声が聞こえたからイスをその声の発生源に向かって蹴り飛ばした。

が、届く前にしがれたオッサン風貌の男がイスを受け止めた。

オレはイラつきつつイスを止めたオッサンに話しかけた。

「レイン、止めるな」

「ここはギルドの中だ。喧嘩なら訓練室に行つてやれ」

「はいはい、ツウ事でジグ、訓練室行くぞ。言っておくが拒否権はない」

レインに窘められたから色男呼びわりした粗野な風貌にレザーアーマーを着込んだ男にそう言った。

「俺の代わりにミリーが行ってくれるそうだぜ!!」

「ふえ!?!?!」

「じゃあな！……！」

ジグはそう言って逃げようとしたが、オレは縮地でジグの背後をとって後頭部を掴む。

「なに、遠慮するな。いずれ気持ちよくなるから」

オレはそう言って握りつぶさない程度に力を強め、訓練室に向かって歩いていく。目的は当然、ジグの処刑……もとい喧嘩だ。

その後、訓練室から聞く者を不安にさせるような男の絶叫が聞こえた。

今さっき付いた返り血を拭っていると滑らかな金髪にウェーブをかけた少女がいたのに気づいて話しかけた。

「ミリー、なにか用？」

「ふえ！？あ、あの、」

ミリーはオドオドしている性格だからかなりじれったく思っているが、それを言うと泣かれて更に話が進まなくなるので言わない。

「あ、お姫様達からまた手紙が来てるよ。今度は6通」

「ジグが言った理由はソレか」

「う、うん。に、睨まないで、ね」

んなことで睨むつもりはない。呆れただけだ。

「あと、任務お疲れさま。マスターが報酬と次の任務で呼んでたよ」

「ギルドマスタークソ爺が？今度はどんな無理難題出す気なんだ？」

まあいいや。とりあえず教えてくれてありがとう」

翔吾がそう言ってオレ達はアイシャ達の住んでいる村に行くことになった。

ほっとくとまたイジケられるので先に言った。そして一方的に言うてからマスターの気配を探って執務室に向かった。

ちゃんと髪が全部燃えたことを確認した後氷らせて消火する。

「ワタシの……………髪が……………」

「女々しいー!!」

「誰のせいだ!?!」

「誰のせいって、たかが産毛でオレの言葉を否定したハゲのせいだ
と思うが」

「オマエ、十年前にかけたハゲの呪いも含めて謝る気無いだろ」

「このジジイ、なに寝ぼけたこと言ってるんだ? 当然に決まってるだ
ろ!?!」

「んな事よりさっさとオレを呼んだ任務を言え!?!」

「分かった。」

オマエ、20日後から護衛任務な。期間は3年間、護衛対象はこ
の娘だ」

マスター
クソ爺はそう言って一枚の写真をオレに見せた。

ピンクの長いポニーテールと白くて大きなリボン、とがったよう
なつり目、瞳の色は珍しいコバルトブルーだ。

あれ？オレ、コバルトブルーの女性をひとり知ってたような。この少女じゃなくて、誰だっけ？

「この少女の素姓は？」

「重要なポストにいる奴の娘じゃないから安心しろ。この子はワタシの娘だ」

ほうほう……………は？

「耳が遠くなっただか？もう一度言っぞ。この子は、ワタシの、娘だ」

「外道ウルトラボケ老人、マッスルハゲジジイ地獄巡りと一年間ピラニアの餌、どっちがいい？」

いや、ここまでキレたのは何年振りだろうな。お陰で殺意メラメラなのに顔に笑顔が張り付いてるよ。

「任務に私情を挟むな、なんて口をスツパクして言ってる奴が何でそんな任務を下してんだ？」

「この子のことは別だ。ワタシのせいでの子は平凡な生活を送ったことがないのだ。」

今だって娘とあまり接しないことで鎮静を保っている」

「嘘言つな。この前娘が冷たいよ〜なんてグチってたろ」

「……………テヘッ」

ブチッ

バキッ

「よし、遺言はそれだけだな。思いっきり殴ってやる」

「殴ってる！！今さっき殴っただろ！！」

なんか哀れに感じたので怒りのボルテージは急下降

「オレでなくともミリーやジグに任せればいいだろ。

特にジグあたりは泣いて喜びながら引き受けそう」

「ミリーはあんなにオドオドした性格だぞ。仲良くすることすら難しい。ジグやその他に関しては論外だ。この娘を傷物にされたらかなわん」

このクソ爺、ホントに頭の中蛆でも湧いてるんじゃない？

「おい、ボケ老人！一つだけ聞くぞ。間違えたら地獄永久巡り！！
オレの性別は何だ？」

「頭大丈夫か？男に決まってるだろ」

「じゃあオレが傷物にしてもいいのか？」

「……………止めて欲しいが、構わん！！」

「その理由を教えて貰おうか？」

「ジグ達は無理矢理することがありそうな性格だから却下したんだ。
その点オマエはそう言ったことに誠実だから相手から言い出さな
い限り手を出さないだろ」

何か怒る気が一気に萎えた。そこまで信頼されていると逆に怒る
気さえなくなる。

「了解。その任務、引き受けた。」

「そうかそうか。ではこの誓約書にサインを」

そう言い放ったジジイの目が光った気がしたが、まあ無視して良い
か。

この誓約書にも何の変哲もないしな。

誓約書というのは裏切りや離脱をしないようにする魔法がかかった物で、サインしたら強制的に内容を履行させる。しかも契約者は紙を破ることができない。

だから護衛や裏の仕事をさせるときによく書いた。

「コレで良いか？」

「おう！いいぞー！！」

そうそう、言い忘れてたがオマエにもサンカレア女学院に通ってもらっぞ

様、このハゲ殺して良いですか？

.....
神

「フザケんな蛸入道！！なんで女子校なんだよ！！！！？
んなことだったらオレは降りる！！！！」

「誓約書にサインしたからもう遅い。残念だったな、諦める」

この蛸入道^{クレンジイ}、確信犯だな。

「よし、地獄巡りをさせてやるよ」

自分の剣の調子を確かめながら言い、逃げようとしたクソ爺を拘束する。その時にハゲマスターが青い顔をしていたが、処刑が楽しみなんだろう。

さあ地獄巡りの開幕だ！！
アンデッドリンチ

その後、ギルド内にこの世の終わりのような悲鳴が一週間響いた。

それから数日後、ギルドには新しいルールが設定された。そのルールとは『詩音を怒らせてはいけない』だ。

ちなみにハゲマスターの地獄巡りは初日より悲惨な状態になった。と言うのも詩音自身が次の任務のことをバラし、その話が瞬く間にギルドの外にまで広がって最終的に国王の耳にまで聞こえた。そして国王はこのギルドを潰そうとして、その煽りを喰らいそうなギルドメンバーはハゲマスターに怒りの鉄拳を喰らわせる。

そう言った経緯があってハゲマスターの命もギルドの存在も危うくなってきた。

まあ詩音は止めればいいやと考えているので楽天的だったとさ

ちゃんちゃん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8606m/>

紅の王

2010年11月28日17時17分発行